

ティーチング・ポートフォリオ

専門 名前	都市生活 沖浦文彦	作成 目的	自らの理念の確認	感想	日付	2021.9
責任	卒業後学生が直面する問いに「正解」はない中で、その時々 に自ら考えて対応するキャパシティを開発する基礎力が必要		JICAの仕事 で様々な場面 を見たこと	目標	30年後も尊厳のある仕事が出来て、自らの意思に従い仕事や生活スタイルを選択できるような学生の育成（基盤作成）	
学部 国際コース 担当	学生はVUCAの時代に生きるとい状況理解、それに対応する 個人としての態度、および専門性（都市地域・マネジメ ント）の基礎を涵養する必要がある。		学生には基礎的 な知識としての学 部教育の定着と 総合が必要	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	聞くだけの講 義は定着しな い	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
担当講義 演習 ゼミ（卒論）	学生の狭い 世界（一人・ 日本）を拡げ る必要がある	世界と日本、そ のの中に各人の位 置づけを考える 機会の提供	プロジェクト目 線で物事を見 て考える（PM 基礎）	学生自身は何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	聞くだけの講 義は定着しな い	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
国際関連担当 海外インター シップ TAPほか	方法	講義を通じて グループを固 定し最終回 に成果発表	講義毎のリ フレクションレ ポート提出	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
FD担当	講義・演習	グローバルPBLプロ グラムの学生の 参加：課題解決 型学修の推進	学外実務者のグ ェスト講師招へい	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
学会・NPO等 団体活動 （プロジェクトマ ネジメント、国 際協力など）	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	JSTさくらサイエ ンスプラン：ベトナム の大学との（オン ライン）ワークショップ	海外インターシ ップの実施（準備 、報告含む）	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
オープンキャンパス	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	JSTさくらサイエ ンスプラン：ベトナム の大学との（オン ライン）ワークショップ	海外インターシ ップの実施（準備 、報告含む）	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
学生部担当 （留学生など）	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	JSTさくらサイエ ンスプラン：ベトナム の大学との（オン ライン）ワークショップ	海外インターシ ップの実施（準備 、報告含む）	学外のコンテストに 学生グループとして 参加	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
改善・努力	学部が申請してい る科研費「国際共 同研究」に参加	自己変容型学習 やエージェント理 論等の検討	現在1年生の学生で 「トビタテ留学」に トライする学生が出 た	ゼミ学生1名が「ト ビタテ留学」に合格した	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える
成果・評価	現在1年生の学生で 「トビタテ留学」に トライする学生が出 た	ゼミ学生1名が「ト ビタテ留学」に合格した	現在1年生の学生で 「トビタテ留学」に トライする学生が出 た	ゼミ学生1名が「ト ビタテ留学」に合格した	学生自身が何 を得たかを自覚 し、説明できる 必要がある	学生が発意して それに取り 組む環境を整 える

© 2016 Kayoko Kurita

大学名 東京都市大学
 所属 都市生活学部都市生活学科
 名前 沖浦文彦
 作成日 2021年12月25日

1. 責務

都市生活学部都市生活学科にて「国際開発プロジェクト研究室」を担当し、「国際開発」と「開発プロジェクト（マネジメント）」の観点から教育・研究活動を行っている。加えて、学部「国際都市経営コース」の準備、立ち上げ、実施、TAP や海外インターンシップ専門委員、学生部留学生分科会など「国際」関連を担当している。主たる教育活動として、「国際都市経営コース」の導入講義となる「国際都市経営概論（1）（2）」のほか「Urban Development & Management」などを担当している。また外部行政・NGO 等と連携したプロジェクト演習、卒論指導、学生のキャリア支援を担当している。

2. 理念

現在の大学生は、大学入学以前には「正解」を正しく、素早く答えるという教育を長年受けており、無意識に「正解は何か」すなわち「問題には正解がある」と考える習慣が根付いていると考えられる。

一方で、彼ら彼女らが社会に出て直面するのは「正解」が準備されていないばかりか、そもそも「問いが何かははっきりしない」「正解などない」世界である。学生は卒業後そのような環境において自ら「問い」を立て、「それに対する望ましい対応」を取り続けることが必要であり、それが出来るためには、大学入学以前のマインドセットを大きく変える必要がある。

特にこれからの時代は VUCA（Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity）の時代であり、そこを生き抜いていくためには、社会の複雑さ（VUCA な状況）に対する理解と想像力を持つこと、そのような状況に対して「問い」、「実現すべき価値」を提案し、その解き方、実現のための道筋を示すことができることが望まれる。

そのためには、（1）学生の「世界に対する視野を拡大」し、自らを相対化する視点を持ち世界に対する理解を深めること、（2）これらの礎となる「専門的知識（の枠組み）」の修得と、（3）常に自分をアップデートし続ける（能力を高め続ける）という「態度」の涵養が必要である。

これらの基礎的素養を大学時代に涵養することにより、学生がその後の長い人生を生き抜くための基盤とし、自らの意思に従い尊厳のある仕事や、生活スタイルを選択可能であるとともに、より望ましい社会の実現に貢献できる人材育成を図りたい。

3. 方法

所属学部では「望ましい都市・地域のあり方」実現のための、学際的かつ文理融合的な教育体系を提供している。そして 2020 年度より「国際都市経営コース」を学部内に立ち上げ、この基盤の上に「国際」という観点を打ち出している。これらの機会を活用し、学部学生一般及び「国際開発プロジェクト研究室」に配属となった学生に対して、次の方針により活動している。

（1）VUCA な世界の現況を知りその中で自らを相対化して位置づける

- 講義を活用して、世界の状況や世界で活躍する人々の生の声を学生に届け、それを基にグループワークにて視点や得たことの共有化、その後のリフレクションレポートによる内省化の促進を図る。
- 海外インターンシップ（リアルの他にオンライン海外インターンシップの促進）や、海外ワークショップ（JST さくらサイエンスプランなど）の機会提供と促進
- これらを通じた学生の視野拡大、世界における自ら（日本）の相対化、海外と関係することの楽しさと難しさを経験してもらう

（2）これらの礎となる「専門知識」の涵養

- 複雑な状況の中で「問い」（実現すべき価値）を提案し、それを実現するための道筋を占める「プログラム・プロジェクトマネジメント」の考え方について、都市や地域に適用する考え方を講義や演習にて提供し、学生に考え方の「枠組み」として定着を図る。特に卒業研究指導はその重要な機会と認識している。
- 都市や地域の課題には学際的アプローチが必須であり、自らが直接提供する内容以外に、学部における教育内容を総合する（再度位置づける）機会を学生に提供し、学部卒業生としての専門性の定着を促進する（講義、演習などを活用）。
- 講義等においては「聞くだけ」のものは定着が弱いと見られ、グループワークの実施や講義成果の内省と提出を求め、学生が能動的に考える機会を提供する。
- 自らのゼミ生については「プロジェクトマネジメント」について踏み込んだ素養を涵養すべく、日本プロジェクトマネジメント協会 (PMAJ) 認定の公的資格 (PMCe: Project Management Coordinator Entry) を習得させる。

(3) 自らをアップデートし続ける「態度」の涵養

- 「態度」の涵養は最も困難な課題であると認識するが、そのためには学生自らがその必要性を認識することが重要と考える。そのためにわが国の現況と将来見通しなどを、世界との比較の中で冷静に実際を伝え、一種の危機感を持たせることも必要と考える。
- そのためには海外ワークショップなどを通じて「自らの世界を拓げる」ことを促進し、その中で生きていくためにはかかる「態度」の必要性について、注意喚起、促すことをおこなう。
- 合わせて大学外の企業や行政、NPO などに対して責任を持った態度と内容による成果物発表の機会を創出し（主に「国際開発プロジェクト研究室」の学生となる）、学生自らがその必要性に気づくことを促す。

4. 成果

- 2021年9月からの初年度「国際都市経営コース」を選択した学生は169名中41名となった。コロナ禍のためにTAPが中止となり海外を実体験できていない学年であるが、想定人数を上回る結果となった。（当然ながらこれは学部としての成果であるが、それに貢献した。）
- 「国際開発プロジェクト研究室」4年生1名が文部科学省「トビタテ留学」プログラムに合格した。これは学部や国際部の先生方、職員の皆様のご支援が大きい。また、「国際開発プロジェクト研究室」3年生2名が、コロナ禍にあるが「オンライン海外インターンシップ」を実施中である。
- 2020年度「国際開発プロジェクト研究室」3年生は全員がPMAJ「PMCe」資格を取得済み。
- 授業評価アンケート、リフレクションレポートの内容より、学生の満足度は高い。

5. 目標

- 「国際都市経営コース」が順調に運営され、当初期待した成果が上がるようにすること。
- 全学において「FD」と「国際」が分離しているように見受けられることから、その融合（FDにおける重要な一要素が「国際」的な観点や取り組みと理解）に貢献したい。
- （コロナ禍が収束した後に）IAESTEなど学外の枠組みに挑戦する学生が出ることを目標とする。

【添付資料】

- * 「国際都市経営概論（1）」講義シラバス
- * 「国際都市経営概論（2）」講義シラバス
- * 「Urban Development and Management」講義シラバス
- * 2020年度JST さくらサイエンスプログラム報告及び成果品（動画）
 - https://ssp.jst.go.jp/report2020/k_vol024.html
 - <https://youtu.be/5qwxcxH4f5I>